

# ふくざわ ゆきち だつあろん 福沢諭吉の『学問のすすめ』と脱亜論

日本・朝鮮・清国3国の連帯を主張してきた福沢が  
なぜ「脱亜論」を書くことになったのだろうか。

## ●「一身独立して、一国独立する」

福沢諭吉は幕末から明治30年代にかけ活躍した啓蒙思想家です。1872(明治5)年に発表した『学問のすすめ』で「一身独立して、一国独立する」という名言を残しました。日本人一人ひとりが独立心をもつことが、日本を西洋列強と対等に付き合うことができる自立した国家にするもとだ、というのです。

福沢は同じ考えのもと、お隣の清(中国)や朝鮮も外国に侵されない独立した国になることを望みました。清はアヘン戦争後、イギリスなど西洋列強に国土を侵されてきましたが、国を守るための近代化が遅れていました。朝鮮はその清を宗主国とする冊封体制にとどまっていた。ロシアが朝鮮半島をねらってくることに對しても、近代的な軍隊を持つことができませんでした。

福沢はこう考えました。「西洋が東洋に迫るそのありさまは、火事が燃え広がるのと同じである。この火事から日本という家を守るには、日本の家だけを石造りにすればすむというものではない。近隣に粗末な木造家屋があれば類焼はまぬがれないからである」

## ●朝鮮近代化の挫折と「脱亜論」

朝鮮には、自国の置かれている危うさに気付いている政治家もいました。福沢はその一人の金玉均ら開化派にはたらきかけ、朝鮮政府が近代化を進めるのを支援しました。1884(明治17)年、金玉均らの開化派は日本を後ろ盾として、近代化をはかるためのクーデターを起こ

しましたが、朝鮮を属国と見ている清は軍隊を出してこれを鎮圧しました。(甲申事変) 清軍はこのとき、日本居留民を残酷に殺しました。

こうした状況に福沢はなかば絶望しました。それで、自ら創刊していた「時事新報」という新聞に「脱亜論」という論文を発表しました。

この中で「わが国は、朝鮮や清の開明を待ってアジアを興す猶予はない」とし、これからは朝鮮、清と謝絶し「西洋の文明国と進退をともにすべきだ」と主張しました。しかしその後も、朝鮮や清の覚醒に期待しつつ、ねばり強く近代化を訴え続けました。



福沢諭吉 (1834～1901)  
(国立国会図書館蔵)



時事新報 1882(明治15)年に福沢諭吉が創刊した新聞。  
1885年3月16日付に「脱亜論」が掲載されました。